

雪椿通信

NOM



①



②

| | |
|---------------------------|------|
| 企画の視点：牧野虎雄展 | P2・3 |
| 所蔵品紹介：亀倉雄策の大同毛織株式会社ポスター | P4 |
| 学芸員レポート：日本の美術館の教育普及活動と鑑賞 | P5 |
| あしあと：「こどもアートギャラリー」を終えて | P6 |
| アートボランティア通信 | P7 |
| MUSEUM INFORMATION／表紙作品紹介 | P8 |

上越市(旧高田)出身の洋画家、牧野虎雄(明治23—昭和21年)の回顧展を開催します。今年は、牧野の生誕120年の記念年でもあります。

牧野は新潟県中頸城郡高城村字中々殿町(現上越市西城町1丁目)に生まれ、現在その地には、「牧野虎雄誕生之地」の石碑が、建立されています(高田公園外堀に隣接する上越教育大学附属小学校前)。石碑の裏面には酒好きだった牧野の「酒訓」が彫られており、酒飲みながらも酒に溺れず、人に迷惑を掛けずに清廉とした画境の中で生きた牧野の姿が偲ばれます。牧野は東京美術学校在学中、第6回文部省美術展覧会(いわゆる文展)で初入選、卒業後9回展で三等賞、10回展で特選、11回展では無鑑査となるなど、若くしてその才能を認められていきました。文展に続く帝国美術院展覧会(いわゆる帝展)でも無鑑査となるなど、画家としての地位もあり、昭和4年には帝国美術学校(現在の武蔵野美術大学)西洋画科教授、8年には多摩帝国美術学校(現在の多摩美術大学)の創設に関わるなど、美術教育においても足跡を残しています。こうした数々の業績を残している牧野ですが、知名度は決して高いとは言えません。戦後すぐに亡くなってしまっていることで戦後の活動がなかったことに原因があるのかもしれませんし、寡黙で作品のことについてあまり語らなかったことや、西欧社会に組みしている現代社会の中で東洋的な独自の画境世界が評価されにくいことも要因かもしれません。

高田出身の牧野ですが、5歳までしか高田で暮らしていません。その後は東京、そして熊本、7歳からは終生東京暮らしで



《麦扱く農婦等》大正7年(1918)当館蔵

した。誕生の地・高田の記憶は「私の生國は越後の高田市であるが、五つの時上京したので、私には郷里といふものがない」と述懐しているようにほとんど残っていなかったようです。しかし、牧野家は高田榎原藩の家臣であったので、高田との繋がりは全くなかったわけではないようです。例えば虎雄の作品に《凧揚》(東京国立近代美術館蔵)という作品がありますが、凧揚げは祖父の影響でしょう。祖父角馬は当時高田の士族の子どもたちに「凧は牧野のじいさんに限る」と凧作りの名人として知られていた影響もあってか、彼自身も子どもの時からよく揚げていて、東京でも電線の間をかいくぐりながら凧をうまく操って揚げたと述懐しています。また別例として、「妙高山」を描いた素描が残っています。昭和2年の『美術新論』(2巻8号)にも妙高山の写生が掲載されています。「郷里はない」と言ってはいますが、これらからも幼き頃の高田での原風景が見受けられ、彼の出生の地への思いは窺えるのではないでしょうか。



《凧》大正13年(1924) 東京国立近代美術館蔵

さて、牧野作品の特徴といえば、「うねり」「ゆがみ」「べた塗り」「即興的」などの言葉が思い浮かぶのではないでしょうか。牧野の画風は独自のものとして知られていますが、何故この様式となったのか。誰かの影響を受けていないのか。その答えは牧野自身の手による記録からは、なかなか見つかりません。しかし、その作品を見ていくと初期の頃はセザンヌやゴッホ、ドラン、シャパンヌ、マティスなど、当時の新しい西欧の思潮を伝えた『スバル』や『白権』などの文芸雑誌等による我が国への移入の影響が多分にあるのではないかと思われます。例えば学び初めの東京美術学校卒業時の《自画像》は、三年担当の藤島武二の影響を受けた作品ということに異論を挟む人はいないでしょう。また、第10回文展

で特選を初受賞した《溪流に水浴》の評では「西洋近代の水浴図、例えばセザンヌ等の同図に感興の源を発したかも知れぬが」と評者もセザンヌの影響を見ています。「うねり」などはゴッホの筆触の「うねり」からではないかとも思われます。しかしながらその作品にしても全てが西洋の影響を受けたものかというとそうではなく、牧野独自色としか言い得ない部分が多く見受けられます。自然を見つめ、それを主観的に表現した作品は、大正期に広まる自我の解放の形として独特な彼の画風に現れたように思われます。

また自我の解放が一層進む後半では、洋画の日本化を目指して南画に傾斜し、昭和10年には「吾々の有るべき南画的要素」と美術雑誌『南画鑑賞』(4巻9号)に口述筆記が掲載され、「純粹に自分の心から湧き出るもの」を本當に自分を伴はらない表現法に托して画くことは、よりも直さず南画を画くことに外ならない。それが日本繪具を用ひるものであれ、其の中核の精神を南画と呼んで構はない。それを別の一面からいへば、眞を衝いてゐるといふこと、自然の實體を的確に擱んでゐるといふことが南画の精神であると思ふのである。」と記しているように、南画に伝わる自然から直接に感應した精神の表現の中に日本の洋画の確立を求めていきます。そこから一筆の筆線で対象を象徴するような「東洋的」「即興的」作品が生まれ、日本人の描く近代的油彩画としての存在証明を温故知新の形で確立したかったのではないでしょうか。

展覧会では、こうした牧野独特の油彩画を御覧いただくばかりではなく、当館で所蔵している多数の画帳類から展示替えをしながら素描類を紹介します。多くは植物写生ですが、子どもや動物、旅先の風景などの写生もあります。その中には昭和9



《春》昭和15年(1940) 東京都現代美術館蔵

年、新潟市で新潟県教育会主催での個人展が開催された折、7月24日から27日まで佐渡に周遊した時の覚え書きもあり、24日の宿泊先本間旅館での夕食の記録もあつたりします。一方で文展や帝展の出品作の構想図も残っており、これらの素描類は牧野の作品制作理解のために貴重です。これらの素描類とを見比べつつ油彩画を鑑賞するのも面白いでしょう。どうぞご期待ください。

(専門学芸員 松矢国憲)

「牧野虎雄展」

- 会期／2011年2月5日(土)～3月27日(日)
- 開館時間／9:00～17:00
- ※観覧券の販売は閉館30分前まで
- 休館日／月曜日(祝日の場合は開館し、翌火曜日休館)
- 観覧料／一般600(400)円 大学・高校生400(200)円
- ※中学生以下は無料
- ※()内は有料20名以上の団体料金
- ※障がい者手帳をお持ちの方は無料(受付でご提示ください)



《庭の木》昭和13年(1938) 当館蔵

亀倉雄策の大同毛織株式会社ポスター ～デザインによる企業イメージ戦略の草分け～

大同毛織株式会社は1879（明治12）年に創立された製織会社です（現在はダイドーリミテッドに改名）。毛糸紡績によって業績をのばした同社は、戦後、高級毛織物への進出を機に1950年に「MILLIONTEX（ミリオンテックス）」の商標を誕生させました。

注文服向け高級服地分野で独走的な売行きを誇った1950年代に、当時新進気鋭のデザイナーとして頭角をあらわしていた亀倉雄策と伊藤憲治の両氏を美術顧問として迎え、ポスター、新聞、雑誌に斬新かつ大胆なデザインによる宣伝広告活動を開。『羊毛は生きている』というキャッチフレーズとともに、「社長自ら指揮する程」意欲的に、ユニークな消費者宣伝を積極的に行っていきます。

当時は他の産業分野でも現在のような活発な宣伝活動は行われていなかったため、同社の宣伝広報は広く注目されるところとなり、広告電通賞をはじめ、数多くの賞を受賞しました。また、1953年7月には亀倉雄策デザインによる「ミリオンテックスネオン塔」を東京八重洲口に、1956年7月には伊藤憲治デザインによる「東洋一のミリオンテックスネオン塔」を大阪の堂島ビルに建設しています。ライバルでもあった伊藤と亀倉に同時に依頼するということは異例でしたが、二人を競わせるようにデザインさせたことで、より高レベルな作品が生まれたといえるでしょう。

同社が1954年3月に開催した「ミリオンテックス創作展」では、猪熊弦一郎、東郷青児、柳悦孝、河野鷹思、勅使河原蒼風、佐野繁次郎ら著名な6名のアーティストによってデザインされた服地と、ミリオンテックスをテーマに演出された空間構成が話題となりました。その際に、亀倉はポスターやパンフレットといったグラフィックデザインに加え、各作家による6つの個性的な空間を一つの展示会として総合的に組み立てる会場構成も担当しています。

大同毛織に関するデザインは、亀倉の1950年代の主要な仕事の一つです。彼は「ミリオンテックス」のシンボルマーク【図1】をはじめ、数多くのポスターをデザインしていますが、その中で



図1 亀倉雄策《ミリオンテックス シンボルマーク》1959年



図2 亀倉雄策《ミリオンテックス》1953年

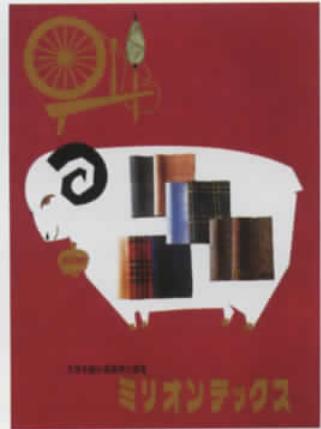


図3 亀倉雄策《ミリオンテックス》1954年

自ら自信作として挙げたのはたった2点のポスターでした【図2、図3】。どちらも写真によるイメージを使った作品ですが、「写真だけを全面に使用した最初のもののように思う」と回想しているように、当時は写真印刷の技術が十分に発達していなかったため、4色で直接カラー分解撮影をしています。このような新しい試みを積極的に取り入れたことによって、この2点のポスターが「なにか『商業デザイン』というものギリギリ限界のやうなもの」にまで到達したと作者に感じさせたのでしょうか。

1953年制作のポスター《ミリオンテックス》【図2】のように服地の写真を全面に使用したポスターは、高級紳士服地のもつ上品な質感や風合いを直截的に伝えるインパクトがあります。一方、展示会用に制作されたポスター《この色と柄が秋のメンズモードを創る！ミリオンテックス展》【図4】では、亀倉自身が「気軽に描いた」というイラストレーションを使用しており、手書きのラフな線が手仕事の温かみを感じさせます。このように、広告の目的や対象に応じてスタイルを使い分けているところに、亀倉の表現の幅広さをうかがうことができるでしょう。

（主任学芸員 濱田真由美）



図4 亀倉雄策《この色と柄が秋のメンズモードを創る！ミリオンテックス展》1953年

「鑑賞ってどうすればいいの?」現在、美術館の教育普及活動における鑑賞に注目が集まっていますが、美術館はこの問題を抱え、試行錯誤をしています。7月26~28日の3日間にわたり東京国立近代美術館と国立新美術館を会場に行われた「美術館を活用した鑑賞教育充実のための指導者研修」は、この問題を全国の教育普及担当学芸員と小中学校の美術教員が話し合い、共有化することができたという点で、意義のあるものでした。その一部をご紹介しながら、これから教育普及活動について少し考えてみたいと思います。

印象的だったのが初日に見学した小学生を対象としたギャラリートークです。作品を前に指導者が子ども達に問いかけます。「何が見える?」「口を開いた魚がいる!」「どこが魚に見えるの?」発言した子どもは絵の前で理由を説明します——今度は別の作品の前へと移り、「さっきの絵と比べて何が違う?」という指導者の質問に導かれ、絵の中で何が起こっているのか、子ども達は自分たちなりに物語をつむいでいきます。最初はなかなか発言しなかった子も他の子に誘発され、次第に自らの言葉を発していきます。

ここでは作家の意図や作品の背景は語られません。ですから正解不正解もありません。対話をしていく中でいろいろな考え方があるということを認める姿勢が大切とされます。このような鑑賞方法は元ニューヨーク近代美術館教育部講師アメリア・アレナスによる対話型鑑賞法を下敷きにしています。アレナスの対話型鑑賞方法では、鑑賞することは目的ではなく、鑑賞を通して社会的活動に必要なコミュニケーション力、観察力、判断力、批判力を養うといった教育的效果が重視されます。

かつての日本の美術館で行われる「鑑賞」は、美術館側が美術史などの知識を一方的に伝えるスタイルが主流でした。しかし現在は、鑑賞者が主体的に作品を見ることによる教育的効果が認められ、鑑賞のスタイルの転換がはかられています。そこで美術館はあれこれと思案を重ねているのです。上に述べたようなギャラリートークを実施するようになったのもその表れです。

また、学習指導要領に「鑑賞」が独立した項目として大きく取りあげられたことも、鑑賞に注目が集まっている理由のひとつです。今回の研修では小中学校の教員も大勢参加されており、鑑賞の授業における美術館活用を想定したグループワークも行われました。今後もこの学校と美術館の連携への関心は一層高まっていくでしょう。

以上のような「鑑賞」を考えるとき、美術館スタッフと鑑賞者の交流というのも大切な要素です。美術館のスタッフは鑑賞者を主体的な鑑賞へ導くだけでなく、美術館自体への興味関心へとつなぐ役割を持っています。美術館は、かつての「美の神殿」のような敷居の高いところから、親しみやすく気軽にアクセスできる場所となることが、主体的な鑑賞活動にもつながっていくのではないでしょうか。私達美術館スタッフも意識の転換をしていかなければなりません。

この研修は指導者の研修であり、研修を受けた私達には指導者として学んだことをそれぞれの地域に還元するという課題が与えられています。新潟県立近代美術館でも今後、鑑賞をはじめとする教育普及活動のさまざまな試みをしていきたいと思います。

(美術学芸員 伊澤朋美)



研修では全国の美術館のガイドブックなどの教材も紹介されました。
さまざまな試みが行われていることがわかります。

「こどもアートミュージアム」を終えて

今回のこどもアートミュージアムは「みる楽しみ、ふれる楽しみ」をテーマにして、参加を呼びかけたところ七つの団体から参加をいただきました。それぞれ工夫を凝らした作品やワークショップがあり、入場いただいた方からも大変好評でした。

こどもアートミュージアムも今回で3回目を迎えることとなります。今回は初めて大学からの参加をいただきました。上越教育大学の教員と学生のワークショップ「ふしぎな ぼうし工房」は、「変身」「かわる・かえる」をテーマに様々な素材を使って、



今までにない「ぼうし」の制作を行い、身につけてみるワークショップでした。「ふしぎなぼうし」が出来上がったら、制作者は実際にぼうしを身につけ、今までの自分から変身するのです。そしてスタッフが「変身」した様子を写真に撮り、制作者の一言コメントを付けてワークショップの会場に展示していました。その活動は制作者のリフレクションとしても機能し、制作者と後の来場者が有機的につながる学びの循環を生み出すという新しい試みでした。

昨年度も作品展示に参加をいたいたい新潟県立高等養護学校手まりの里分校の作品《ダンス》は、迫力のある大作でした。昨年度末に手まりの里分校職員と近代美術館の職員とが協働で「ワークショップ マティスの切り絵に迫る」を行った際に制作したものでした。

燕市の小中川児童館からは、ワークショップ「廃材工作～○や□で作ってみよう～」とそのワークショップでのこどもたちの作品展示に参加をいただきました。牛乳パックやトイレットペーパーの芯の切り口の、□や○の形を生かして、造形的要素を意



識させながら、楽しく作った作品に仕上がってました。

平面や通常の立体だけでなく、空間と光と影を用いた作品の展示もありました。上越教育大学附属中学校1年生の作品です。自分たちで「お話」を考え、必要なキャラクターを画用

紙で切り出します。そして切り出したキャラクターに光をあてて、できた影を操作してDVDに収録しました。今回は40インチ程度の画面で映像を随時放映し、入場した方に鑑賞していただきました。短い台詞も入っていて制作時の楽しい雰囲気が伝わってきました。また、光の強さや、光源と型紙までの距離を変えることによって思いがけない効果も生まれていました。

この他にも、上越市の谷浜・桑取青少年健全育成会、上越市立吉川小学校3年生、長岡市立東中学校美術部、長岡市立江陽中学校美術部から日頃の技能向上の鍛錬の成果、時間をかけて制作した作品の数々を展示していただきました。また、新潟県立美術館友の会からは、「ボンペイ展」に展示される《イルカのモザイク》に合わせてワークショップ「ボンペイの切り絵に挑戦」を行っていただきました。

チラシや不要になった紙を小さく切り刻み、色別に分け、材料にします。それを段ボールに描かれた下絵の所に貼っていくものです。根気のいる作業ですが、モザイクの美しさを体感できるワークショップでした。このワークショップはボンペイ展開催中に常設展休憩コーナーに設置された「ボンペイのイルカのモザイクに挑戦」コーナーへと引き継がれ、お客様の共同作業によって次々とモザイク画が生み出されていました。



「こどもアートミュージアム」は、ワークショップの内容がいろいろなジャンルに及んで多彩になり、目指している参加型の展覧会への第一歩が踏み出せたように感じます。今後ともいろいろな団体から積極的な参加をいただき、多方面からのご指導を仰ぎながら、「みる楽しみ、ふれる楽しみ」を追求できる展覧会を目指していきたいと考えています。

(学芸課長代理 野村宏毅)

昨年の6月21日(日)にアートフェスタNEO²のオープニングイベントとして第1回キャンドルナイトを実施し、大変好評をいただきました。そこで、このキャンドルナイトを1回限りのイベントとして終わらせるのではなく、千秋が原の魅力を高め、美術館と多くの方々とつながることを目指して、今年度もキャンドルナイトを実施したいと春から考えていました。

しかし、今年度の展覧会予算の中にキャンドルナイトを位置づけることができず、今年度の実施は無理かとあきらめかけていました。そんな状況下で、新潟放送興業様、新潟日報美術振興財団様、株式会社第一印刷所様、新潟交通商事様より協賛をいただき、第2回キャンドルナイトの実施が可能となりました。

そこで、今回は昨年度の反省を踏まえ、次のように実施する計画を立てました。

- ①7月30日(金)に実施する。今回の目的を「でんきをけしてスローな夜を」というエコな環境を目指すこととともに、1945(昭和20)年8月1日、2日の長岡空襲で亡くなった方への鎮魂とする。
- ②会場は昨年度に引き続き、千秋が原ふるさとの森内「花の広場」とする。ミニコンサート会場は「花の広場」の中央に変更し、花に囲まれたコンサートとする。
- ③キャンドル数を昨年度の1,000個から2,000個に倍増する。
- キャンドルを入れるカップには後片付けが容易なように、昨年度の砂ではなく今年度は水を入れる。
- ④小学生から描いてもらう絵を、昨年度の6校から合併前の旧長岡市内の市立小学校すべてに拡大する。(最終的に33校が参加、枚数も昨年度の400枚から約1,700枚に。)
- ⑤スタッフをボランティアで募集する。(最終的に、一般ボランティア2名、長岡造形大学の学生15名、友の会会員7名、アートボランティア13名からご協力いただきました。)
- ⑥好評だったミニコンサートを今年度も実施し、演奏者はアートボランティアが地元のアーティストに依頼する。(今回は、ギターとフルートを演奏する「旅一座」とアカペラアンサンブル「SMAS」にご出演いただきました。)

そして、7月30日(金)を迎えました。今回も雨が心配されましたが、幸い終了まで雨は降らず、最後まで「花の広場」で開催することができました。キャンドルを並べる際に予想以上に風が強く、セットしたキャンドルが何度も倒れてしまい、立て直す作業が続きました。しかし、2,000個のキャンドルが広場いっぱいに灯る光景を目にして、それまでの苦労が報われたと感じました。

今回のキャンドルナイトを実施するにあたり、絵を描いていたいた長岡市内各小学校の皆さん、長岡緑地環境協同組合の皆さん、そして企画・準備・後片付けに至るまでご協力いただいた一般ボランティア・長岡造形大学の学生の皆さん・アートボランティア・近代美術館友の会の皆さんに改めて感謝申し上げます。

(副参事 佐藤克己)



キャンドルをセットするアートボランティア

キャンドルナイトを終えて 小山万紀子・高坂友香里

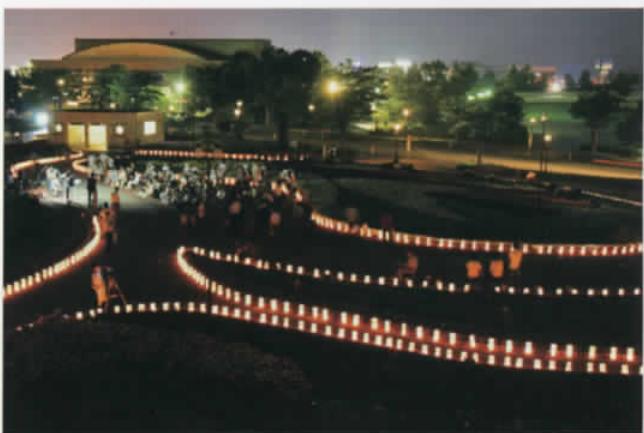
梅雨明けとともに猛暑が続いた7月の30日、朝から雨模様で、外での開催が心配されましたが、予定通り「花に囲まれたキャンドルナイト」を行うことができました。

今年は去年の倍の2,000個のキャンドルを灯すにあたり、新しく長岡造形大学の学生さん、一般のボランティアの皆さんとの協力をいただくことができました。キャンドルのカップを倒す風と蒸し暑さの中、いつしか無心になり2時間程かけて並べ終わりました。

日暮れ始め、一つ一つのキャンドルに火を灯す作業は楽しいもので、暗くなるにつれ幻想的になっていきました。また、スカイウェーからの眺めも格別で、2,000個のキャンドルが一望できたのは壮观でした。

2回目のキャンドルナイトを終えて、大学生の皆さん、一般ボランティアの皆さん、美術館の職員の皆さん、友の会の皆さん、そして私たちアートボランティアが一体となって頑張ったという、うれしい達成感がありました。

この輪が広がって、また来年へと繋がってくれることを願っています。



夕暮れに灯るキャンドル(左上はミニコンサート会場)

MUSEUM INFORMATION

開館時間

- ▶午前9時～午後5時
※11月19日までの企画展開催中の毎週金曜日は午後6時30分まで開館します。
- ※観覧券の販売は閉館30分前まで
- ▶レストラン／午前10時～閉館時間まで
※ラストオーダー〔食事〕閉館1時間前まで
〔飲物〕閉館30分前まで
- ▶ミュージアムショップ／午前9時～閉館時間まで

休館日

- ▶毎週月曜日
※月曜日が祝日の場合は開館し、翌日休館します。
- ※保守点検・展示替え・年末年始等のため下記の各期間は休館します。
11月29日(月)～12月1日(火)、12月28日(火)～1月3日(水)、1月24日(月)～28日(金)
※都合により、臨時休館する場合があります。
- ▶月曜開館
11月22日 1月10日 3月21日

観覧料金

- ▶企画展
企画展によって観覧料が異なります。小学・中学・中等教育(前期)／無料なお、企画展の観覧料で、常設展もご覧になれます。
- ▶常設展(展示室1・2・3)
 - 一般／420円(340円)
 - 中等教育(後期)・高校・高等専門・大学／200円(160円)
- ※学生証を提示してください。
- 小学・中学・中等教育(前期)／無料
※()内は有料20名以上の団体料金です。
- ※障がい者手帳をお持ちの方は無料になります(受付にて手帳をご提示下さい)。

イベント情報 <11～3月>

企画展

9/11(土)～11/23(火祝) ポンペイ展 世界遺産—古代ローマ文明の奇跡
2/5(土)～3/27(日) 牧野虎雄展

常設展

9/10(金)～11/28(日) 龟倉雄策の世界
12/2(木)～1/23(日) 近代美術館の名品
1/29(土)～4/10(日) 個人コレクターたちの肖像

共催展

12/11(土)～12/16(木) 長岡市美術展覧会
1/4(火)～1/16(日) 新潟県ジュニア展「長岡展」

ワークショップ(参加無料／エントランス集合／午後2時～)

《発見! びじゅつかん》
2/27(日) クイズで作品オリエンテーリング

美術鑑賞講座(聴講無料／講堂／午後2時～)

11月 6日(土)「ポンペイの遺産—いわゆる「古代印象主義」と西洋中世の絵画」
2月19日(土)「郷土の作家シリーズ2 牧野虎雄」

万代島美術館情報

- ◇物語の絵画
10月9日(土)～11月28日(日)
- ◇岩合光昭写真展～ねこ～
12月11日(土)～2月20日(日)
- ◇画家のまなざし
スケッチ、構想、そして作品
3月5日(土)～3月31日(木)



岩合光昭《エジプト・カイロ》© MITSUAKI IWAGO
「岩合光昭写真展～ねこ～」

The Niigata Bandaijima Art Museum 新潟県立万代島美術館

〒950-0078 新潟市中央区万代島5-1
(朱雀メッセ内 万代島ビル5F)
TEL 025-290-6655 FAX 025-249-7577
<http://www.lalanet.gr.jp/banbi/>

ミュージアムショップ KINBI より

〈おすすめ商品のご案内〉

☆2011年度カレンダー☆

人気のモネ、クリムト、スタンレンの他にも現代アート系のダイアリーや日めくりカレンダーも入荷しました♪
数に限りがございますのでお早めに!!

| | |
|------------|--------|
| ○カレンダーS | ¥950 |
| ○カレンダーL | ¥1,890 |
| ○日めくりカレンダー | ¥1,995 |
| ○スケジュール表 | ¥2,730 |



■ミュージアムショップ KINBI TEL 0258-28-2200

レストラン 広告塔 より

〈人気メニューのご案内〉

ポンペイ展開催を記念して、特別限定メニューをご用意いたしております。

ヴェスヴィオス火山に見立てた肉とグラタンのコラボ、イタリアで食されている平焼きパンに、本場イタリア産プロシュートハムとスマーカサーモンのオープンサンドなど、など…お召し上がり下さい。



豚ヒレ肉のグラタン焼き ¥1,250



フォカッチャサンド(スープ付) ¥880

※11月24日から平日に限り、和洋中の創作料理『気まぐれランチ』780円をはじめ、人気の石焼ビビンバ、焼きカレー等、温かいメニューをご用意してお待ち致しております。

■レストラン 広告塔 TEL 0258-29-5001

表紙作品解説

- ①松井紫朗 《Voice-Scope》 1997年
- ②前田哲明 《Untitled 95-0》 1995年

胃や食道など、体内にある「消化器」は、医学的には体外だということをご存知ですか? 松井紫朗が近年のインスタレーション作品でたびたび見せる管のような造形は、いわば食道のように、内にありながら同時に外でもあるもの、を志向しているのです。

それはともかく、当館の庭園内に設置された松井の《Voice-Scope》は、船内で離れたところの相手に声を伝える「伝声管」にも似ています。ブロンズでできた管が三方に伸び、開口部はラバ状に広がっています。それぞれの開口部に人が立ち、声を交わして遊ぶことも可能でしょう。題名は、telescope(遠くを見る道具=望遠鏡)から来ているようで、直訳すれば「音声鏡」。あるいは、あえて誤訳っぽく「声を見る道具」と訳すなら、目に見えない声の通り道を造形化しようとする作家の意図が、むしろはつきりしてくるかも知れません。

前田哲明《Untitled 95-0》は、地を這う松井作品とは対照的に、当館の屋上にひとときわ威容を誇っています。地中から現れた巨人の指が空の三日月を掴んでいるようでもあり、信濃川河川敷のありふれた風景を、非日常的なものにしています。

新潟県立近代美術館だより 雪椿通信 第35号

編集・発行 THE NIIGATA PREFECTURAL MUSEUM OF MODERN ART
新潟県立近代美術館

〒940-2083 新潟県長岡市千秋3丁目278-14
TEL 0258-28-4111㈹ FAX 0258-28-4115
<http://www.lalanet.gr.jp/kinbi/> e-mail kinbi@coral.ocn.ne.jp

制作・印刷 株式会社中央印刷
〒940-0041 長岡市学校町1-9-21 TEL 0258-35-3500

発行日 2010年10月31日